

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ウェルビーイングの視点からみたデンマークの市民社会

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野村, 武夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000958

第5章 ウェルビーイングの視点からみたデンマーク の市民社会

野村 武夫

社会福祉法人 紫野福祉センター

Looking at Danish Civic Society from the Perspective of Well-being

Takeo Nomura

Murasakino Social Welfare Center

本論文は社会がウェルビーイングの状態を達成するための条件について論じたものである。ウェルビーイングは人間がたんに身体的に、また精神的に良好な状態のみならず、社会的に良好で満足できる状態にあることを意味するものであり、1946年にWHOが新しい健康の概念として提唱した。今日ではウェルビーイングの概念は、社会福祉あるいはソーシャルワークの重要な目標の1つとなっている。

本論文ではデンマークがウェルビーイングの状態にある社会として有利な位置を占めることに成功した国の1つであることを論じている。ウェルビーイングの状態を達成するための条件としては、デンマークでは北欧モデル、民主主義、自由、多様性、ノーマライゼーション、共生と連帯などであることを指摘している。

The aim of this paper is to consider what conditions are needed to achieve a state of well-being for a society as a whole. Well-being is defined as a good or satisfactory state for people, not only physically and mentally but also socially. Well-being was included as a new concept for health by WHO in 1946, and now it is used as an important aim for social work.

In this paper, it is argued that Denmark has been successful in achieving the advantageous position as a society with well-being. The conditions for having achieved this include: the Scandinavian Model, democracy, freedom, diversity, normalization, coexistence and solidarity. These important factors contribute to Denmark becoming a society with well-being.

1 はじめに	4.1 民主主義的価値の要素
2 デンマーク社会の概観	4.2 制度・政策的要素
3 デンマーク市民社会の特徴	4.3 社会関係的要素
3.1 北欧モデル	4.4 精神的・内面的要素
3.2 民主主義	4.5 4要素の統合による自己実現
3.3 ノーマライゼーション	5 ウェルビーイング社会としてのデンマーク
3.4 自由と多様性の尊重	6 おわりに
3.5 連帯と共生	
4 ウェルビーイングの構成要素	

* key words: Denmark, Well-being, the Scandinavian Model, Democracy, Freedom, Diversity, Normalization, Coexistence and Solidarity

* キーワード：デンマーク、ウェルビーイング、北欧モデル、民主主義、自由、多様性、ノーマライゼーション、共生と連帯

1 はじめに

近年、社会福祉の取り組みの新しい理念として、ウェルビーイング (well-being) という用語が登場し、ウェルビーイングを社会福祉の目的の1つとしてとらえられることが多い。ウェルビーイングという用語は、健康についての新しい概念として、1946年にWHO (世界保健機関) が発表した憲法草案に初めて登場している。草案では「健康とは身体的、精神的及び社会的な良好な状態であって、たんに病気でないとか、虚弱でないということではない」と定義している¹⁾。ウェルビーイングの訳語としては、良好な状態、安寧、という日本語が当てられる場合が多いが、社会福祉では、良好な状態として、個人の尊厳と人権が尊重され、よりよき生活の質や自己実現が保障される状態を含むものとされている。そして、ウェルビーイングは、最低限度の生活保障のサービスのみではなく、人間的に豊かな生活の実現を支援し、人権を保障するためのサービスによって達成されるという²⁾。

それではこのウェルビーイングの状態が達成されるためにはどのような条件が必要となるのであろうか。またそのような条件を備えた社会はどのような特徴を有しているのか。本論文はウェルビーイングを達成する最も近い国としてデンマークの市民社会をその1つの例として取り上げて考察する。筆者は福祉国家デンマークの市民社会が、なぜウェルビーイングを達成する条件を有しているといえるのか、また、デンマークを世界的にみてもすすんだ福祉国家 (「生活大国」) として発展させることができた背景、すなわちデンマークがウェルビーイング達成を導くことのできる社会的な条件とは何かを明らかにすることが本論文の目的である。

2 デンマーク社会の概観

デンマークは同じ北欧諸国の中でも人口は546万人（2008年）、面積4万3千という小さな国³⁾であるが、社会福祉政策、労働市場政策、温暖化防止対策やエネルギー政策などにおける先進国として世界的にも注目されている。2009年12月に首都コペンハーゲンで開催されたCOP15では議長国としての役割を果たした。

国土の約90%が耕作地に適しているという恵まれた立地条件と、大規模集約農業の成功によって農業国として発展⁴⁾したが、戦後は工業化と近年の順調な経済発展に支えられて、豊かな国民生活を実現した。2006年の一人当たりの国内総生産（GDP）⁵⁾は36,014米ドル（日本は33,573米ドル）、一人当たりの国民所得⁶⁾は世界第4位の58,075米ドル（日本は35,470米ドル）という高水準を達成している。

順調な経済成長、高い女性の就業率⁷⁾（2006年現在73.2%、日本は58.8%）、男性を1とした場合の女性の2007年の賃金格差⁸⁾が0.73（日本は0.45）という比較的高い水準に加えて、高い税率（所得税平均約50%、消費税一律25%）による税収などによって福祉、医療、教育はほとんど無料、無拠出による年金制度などによって高水準の福祉国家（「生活大国」）を実現した。しかも徹底した所得再分配政策、社会支出の対GDP比⁹⁾29.5%（2005年 日本は同年14.0%、OECD平均は21.2%）という公的社会サービスの充実などによって、2000年半ばの相対的貧困率¹⁰⁾はスウェーデンと並んで5.3%という世界で最も貧困格差の小さな国となった。ちなみに日本は14.9%で、2009年には15.7%という先進諸国ではアメリカに次ぐ貧困格差の大きな国となった。

前述した経済的社会的な状況に加えて、積極的な労働市場政策（フレキシキュリティ）¹¹⁾による安定した雇用の確保、女性が子どもを持って働きやすい環境と子育て支援の制度的な充実などによって、デンマークはしばしば「世界で最も幸福な国」と評価され、OECDの「生活満足と幸福感」に関する2006年の調査では、デンマークは90.1%という高い結果を得ている（日本は71.1%、OECD平均は79.4%）¹²⁾。

デンマークが福祉、医療、教育、年金、環境保護（温暖化防止対策）など国民生活の身近な部面において、先進的で充実した取り組みを実践することによって、世界的な福祉国家として優れた実績を維持することができたのは、先ほど述べたように、順調な経済成長、高税高福祉、徹底した所得再分配政策、旺盛な女性の社会進出などによるものである。しかしここで強調しておかねばならないのは、このような優れた福祉国家を実現した背景には、デンマークの市民社会に着実に根を下ろした民主主義と、その民主主義の発展に貢献してきた教育、それに国民の間に定着している自由の尊重と社会連帯意識の広がりがあったからこそ達成し得たのである。

3 デンマーク市民社会の特徴

世界的に見てスウェーデンとともに、国民すべての生活を保障する普遍主義的な福祉国家をもたらしたデンマーク市民社会を構成する基礎的要因として、次の5項目を指摘しておきたい。すなわち、1. 北欧モデル、2. 民主主義、3. ノーマライゼーション、4. 自由と多様性の尊重、5. 連帯と共生、である。これら5項目はデンマーク社会を構造的に特徴づける重要な基本的な要素でもある。この5つの特徴について以下に若干の解説を試みたい。

3.1 北欧モデル

北欧モデルはスカンディナヴィア・モデル (Scandinavian Model) ともいわれ、北欧諸国、とくにデンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランドにおける共通の社会政策、あるいは福祉政策に共通した政策形態である。北欧モデルの核となるものは、経済と社会のさまざまな領域における広範囲な市民参加であり、その目的とするものは人々の生活条件の向上と平等の維持であるとされる (高嶋 2001: 248)。

また、北欧モデルの基本的な性格は普遍主義 (universalism) であり、全国民を包括する福祉国家の発展を目指している。この普遍主義は社会的市民権の拡大と連動して社会的・市民的平等の実現を目指している。

3.2 民主主義

デンマークは「胎児から墓場まで」という生涯にわたる生活の安心と生活保障を充実させるうえで基本的な条件を備えている国である。その基本的な条件であり、かつデンマーク社会の発展に不可欠な原動力となったのがデンマークの民主主義である。結論的にいうならば、デンマークの社会を福祉国家として発展させ、社会保障制度や社会サービス (福祉、医療、教育、年金、雇用など) を充実させるうえで最も重要な役割をはたしたのは、この国が築いてきた民主主義であるといっても過言ではない。また今日のデンマークにおける福祉政策や生活に直結する社会サービスは、自由権、政治的市民権、社会的市民権を内包する民主主義が発展した市民社会において実践されてきたといっ

てよい。

デンマークにおける民主主義の発展と浸透によって、国民の政治意識の向上、行政執行過程の透明化、市民参加型民主主義 (ユーザーデモクラシー) の確立、国民世論の政策への反映、政策決定過程の民主主義的手続きの制度化、市民の権利尊重、分権主義の拡張による市民生活の向上といったことがらが、その成果として市民社会に根付いている。

3.3 ノーマライゼーション

ノーマライゼーション (normalization) はすでに世界的に広く定着している障害者福祉の基本的な理念である。この考え方をデンマークの障害者福祉の基礎に据え、世界にその思想を広げることに尽力した人物がN. E. バンク-ミケルセン (Bank-Mikkelsen, Niels Erik 1919-1990) である。彼はノーマライゼーションの理念の根幹となる思想について、「それは全人類の平等であり、たとえその人の障害がどんなに重いものであっても、他の人とまったく平等であり、法的にも同等の権利を持つ」ということを強調した。バンク-ミケルセンは、人は障害のゆえに差別されることがあってはならない。たとえ身体的にまた知的に障害があったとしても、一人の人間であり、障害のない人と同等であり、一般市民と同じ条件のもとで生活する権利がある、と主張している (Hanamura 1998: 49-50)。

ノーマライゼーションは、障害のある人を同じ平等な人として受け入れ、その人の生活条件を可能な限り普通の生活条件と同じとなるよう努力するという考え方であり (Hanamura 1998: 156)、端的に言えば、ノーマライゼーションとは、障害のある人たちが、可能な限りその国の、あるいはその地域のごく普通の一般市民と同じような条件のもとで、権利として生活できるようにすることである。そのように生活することがあたりまえ (normal) であるような社会を実現することは社会全体の義務であり、この点でいうなら、ノーマライゼーションは社会の変革を迫るものであるといえよう (野村 2005: 111)。

3.4 自由と多様性の尊重

デンマークの国や社会を特徴づける最も重要な価値は自由であると考えることができる。自由が存在しないところでは個人の社会的存在はありえないし、人間らしい生き方は不可能である。また自由が徹底して保障されるところにおいては自己決定が可能となる。そして自己決定は自己実現をもたらす条件となる。自己実現が達成、あるいは可能となれば、幸福で充実した、自分らしい人生や生活を切り拓くことができる。この自由を基礎にデンマークの市民は自分らしい生き方や、ライフスタイルを大切にしながら、日々の生活を充実させようとしてきた。それゆえデンマークでは個人の価値観、生き方、生活の仕方、自分の進路などに関して、自己の責任において最大限の選択の自由を認める国である。

3.5 連帯と共生

デンマークは相次ぐ領土喪失によって、地理的に小国に追い込まれたという歴史的な事情から、もともと国民相互の連帯意識が強い国である。それとは別に、連帯がデンマークの市民社会の発展をもたらす基盤の1つとなった理由は、連帯 (solidarity) は福祉

政策の一般的な原則であるからである (The Danish Disability Council 2006: 21)。

もともとデンマークの連帯の基本的理念は、「社会は全体として個人に責任を負う」というものであり、博愛的精神が背景にあると考えられる。社会はさまざまな社会保障政策や社会福祉サービスを介して、個人の生活保障や生活を支援する責任を負っている。連帯の理念は博愛的思想を基盤としており、その理念の具体的な取り組みとして社会保障制度や社会サービスが展開されるのである。

デンマークの場合、社会福祉政策は、医療、教育、年金などの社会サービスと同様、その財源は世界で最も高い税率を課して徴収した税であり、この税による福祉政策の実施は、博愛的精神を背景にした所得再分配による政策の実行にほかならない。その意味で国民の納税を基にした所得再分配政策の実施、すなわち税制に基づく資金供給そのものが社会連帯を意味するものと理解されている¹³⁾。

連帯は当然に共生の精神をうみだし、そして共生の精神は連帯を強固にする。ノーマライゼーションは共生の実現をめざす福祉の理念であるが、ノーマライゼーションは社会参加を促し、それによって社会連帯を導くものであるといえよう。従って、連帯と共生は密接な関係にあることは明らかである。

4 ウェルビーイングの構成要素

ウェルビーイングは、用語としては1946年のWHOの新しい健康の定義に用いられているが、社会福祉の分野に登場してまだ日は浅く、その意味や解釈は抽象的、理念的である。ウェルビーイングについてより理解を深めるためには、ウェルビーイングがどのような要素によって成り立つのかを検討し、総合的にとらえる必要がある。ここではウェルビーイングを構成する要素として4つを取り上げ、その内容や目的などを検討し、ウェルビーイングについて包括的な理解を試みたい。ここで取り上げる4つの要素とは、1. 民主主義的価値の要素、2. 制度・政策的要素、3. 社会関係的要素、4. 精神的・内面的要素、である。この4つの要素が個人のレベルで望ましい状態で満たされる場合は、個人としてのウェルビーイングを実現することが可能であり、同様に4つの要素が良好な状態で社会全体に浸透しているならば、その社会はウェルビーイングな状態にあると考えることができる。以下に4つの要素について説明する。

4.1 民主主義的価値の要素

この要素の内容としては、民主主義を成立させる普遍的な価値でもある自由、平等、人権擁護、人間尊重などを含んでいる。自由、平等、人権擁護と確立、人間尊重などの確立はウェルビーイングの達成を保障するものであり、これを欠いてはウェルビーイングは不完全な状態となる。この要素の目的は公正、正義、倫理や秩序の回復、進展、拡

大である。

ひとびとが人間としての尊厳と人権を保障され、平等が確保され、自由が最大限尊重されるような社会で生きることが、人間らしく社会生活を営むうえで重要かつ必要な条件である。差別や偏見、社会的排除の防止、克服を含め、公正と正義が実現する社会の実現は、民主主義が発展する社会であり、自己実現を可能にする社会であるといえる。ウェルビーイングは民主主義が形式としてではなく、実質的に現実社会で機能するところにおいて成立するものと考えることができる。

4.2 制度・政策的要素

この要素の内容としては、制度・政策として運営される社会保障や社会サービスである。具体的には公的扶助、年金、保健医療などの包括的な社会保障制度や、国民の生活に直結する社会サービスとしての医療、福祉、教育、雇用、住宅、公衆衛生、環境保護などが含まれる。社会保障や社会サービスの制度的、政策的な目的は、個人の生活保障、所得保障、教育保障、生活環境の保護などを包括する全体的な生活上のニーズの充足である。社会保障制度や社会サービスが十分機能することによって、生活の経済的安定、生活基盤の確立、健康の増進、教育機会の保障、住居の確保、環境保護¹⁴⁾などが可能となる。これらはウェルビーイングの経済的側面の充実・安定につながると考えられる。

4.3 社会関係の要素

この要素の内容としては、個人が社会的存在として関わる家族、学校、職場、多様な社会集団、組織、地域社会などにおける対人関係、あるいは相互関係を意味する。この要素の目的は、多様な集団や組織における相互依存関係の発展である。個人が関係する多様な集団や組織における対人関係や、集団や組織との関係が円滑に展開されているかどうかは、ウェルビーイングのよりよい状態を達成するうえできわめて重要なことである。人間は社会的存在であり、多様な社会関係の中で生活しているので、経済的側面や、民主主義的価値の側面がいかに充実していようとも、対人関係や相互依存関係が貧弱な場合は、ウェルビーイングの達成は困難である。

4.4 精神的・内面的要素

この要素は個人が生活を営むなかで、宗教（信仰）、信条、スピリチュアリティ、文化、芸術といった個人の精神的文化的なものを内容としている。この要素の目的は、個人の内面的価値の充足や創造をもたらすことである。この要素が機能するためには、宗教的自由や表現の自由など、個人の内面的自由が保障されていることが条件となる。宗教（信仰）、信条、スピリチュアリティ、文化、芸術などの個人の精神的文化的な要素は、個人の生きがいや、精神的価値の発展、創造的な生活の実現を導くものであるとい

えよう。と同時に個人の精神的・文化的価値の充実、ウェルビーイングを内面的に充実させるという点で意味があると考ええる。

4.5 4要素の統合による自己実現

以上のようなウェルビーイングを構成する4つの要素が統合されることによって、ウェルビーイングが目指す生活の質（Quality of Life）の向上、エンパワメントの助長、それによって自己実現の達成が可能となると考えることができる。どの要素もウェルビーイングにとって重要な構成要素であり、どれかを欠くことは望ましいウェルビーイングを期待することはできない。また、これらの4つの要素が均衡を維持しながら伸長することによって、個人の生活がウェルビーイングの状態を実現することが可能である。

4つの要素がそれぞれどの程度到達したかを検討することで、個人、家族、組織、地域などにおけるウェルビーイングの状態をある程度判断することができるであろう。また、同様にどの程度その社会が全体としてウェルビーイングの状態にあるかを評価することも可能であろう。

5 ウェルビーイング社会としてのデンマーク

ウェルビーイングが、本論文の冒頭で述べたように、社会福祉の立場からは個人の尊厳と人権が尊重され、よりよき生活の質や自己実現が保障される状態を含むものとされる。そして社会的にはウェルビーイングは、個人の尊厳と人権の尊重、自己実現の保障や生活保障のためのサービスだけでなく、人間的に豊かな生活の実現と、よりよき生活の質の保障を支援するサービスによって達成される、と考えることができる。

デンマークの市民社会を特徴づけるものとして、北欧モデル、民主主義、ノーマライゼーション、自由と多様性の尊重、連帯と共生という要素を指摘したが、これらの要素は先ほど述べたウェルビーイングを達成する条件となりうると考えられる。さらに、すでに指摘した、ウェルビーイングの構成要素のうち、すくなくとも民主主義的価値の要素、制度・政策的要素は、デンマークの社会がウェルビーイングの状態を実現する上で有効に機能していると考えられる。

このような観点からデンマークの社会を概観すれば、デンマークの社会はまさにウェルビーイングの状態にあるか、あるいは状態を達成するうえで極めて有利な立場にあると考えられるのである。デンマーク社会がウェルビーイングの状態を示すいくつかの現象として、繰り返しになるが、社会経済的には北欧モデル実施の成果としての経済的平等の確保、世界最小の相対的貧困率、安定した労働市場、女性の高い就業率と充実した子育て支援策、積極的な女性の社会進出などによる世界第4位のジェンダーエンパワメント指数（GEM）、自己負担のない医療、福祉、教育などの充実した社会サービスが進

展している。さらに民主主義が市民社会に定着していること、自由や男女平等が徹底し、自己決定や多様な価値観が尊重され、連帯や共生意識が高いといったことがデンマーク社会をウェルビーイングな状態とするうえで大きな貢献を果たしている。それゆえしばしばデンマークが「幸福度世界一」と評価されるが、このようなこともデンマークがウェルビーイングな状態に最も近い国であるか、あるいはウェルビーイングの状態に最も有利な位置にあることを物語っているといえよう。

ところでデンマークの市民社会がウェルビーイングの状態にあるか、あるいはその状態を達成するうえで有利な立場にあることを裏付ける調査結果がある。ウェルビーイングの指標となりうる「人間のよりよい生活」、「人間的に豊かな生活」に関連する興味深い調査結果（2009年）が、EUの社会労働環境に関する国際機関、ユーロファウンド（European Foundation for the Improvement of Living and Working Conditions）から報告されている。この調査ではEU加盟27カ国及び未加入の4カ国、合計31カ国、約3万6千人からの回答をもとに、人々が自国での生活の質に関してどのように評価しているかを報告書（Second European Quality of Life Survey Overview 2009）にまとめている。調査では「主観的ウェルビーイング」（Subjective well-being）に関するものとして、「生活の満足度」、「幸福感」、「将来に対する楽観的傾向」の3点を調査項目にして10段階評価で回答を求めた。その結果は表1（「生活の満足度」、「幸福感」）、表2（「将来に対する楽観的傾向」）に示している。

生活満足度や幸福感はあくまで主観的な個々人の評価であるが、それぞれの国民のどの程度の割合で自分の生活に対して満足を感じているか、またどの程度幸福と感じているかを推し量る目安となる。

「生活の満足度」、「幸福感」については、表1に示すようにデンマークが両方とも最高の指数（8.5, 8.3 合計16.8）となっている。次いでフィンランド（8.2, 8.3 合計16.5）スウェーデン（8.3, 8.2 合計16.5）、ノルウェー（8.1, 8.2 合計16.3）で北欧諸国が上位を占めている。EU加盟27カ国平均（7.0, 7.5 合計14.5）と比較するとデンマークは2ポイント以上も優位な位置にある。

また、「将来に対する楽観的傾向」に関する調査（10段階評価）でも、表2で明らかのようにデンマークは29%の人が強い楽観的傾向にあると回答し、「そう思う」と答えた56%を加えると、合計85%のデンマーク人が将来に対して楽観的であると回答している。この数値は全調査対象31カ国で最も高い。スウェーデンは肯定的な回答者の割合ではデンマークと並んだ（強い楽観的傾向を示した人の割合は42%でデンマークをはるかにしのいでいる）が、否定的な回答を加味した結果、総合的には第2位となった。以下、ノルウェー、アイルランド、フィンランド、オランダと続いている。

北欧諸国は「生活の満足度」、「幸福感」、「将来に対する楽観的傾向」ともに指数や比率において上位に位置している。同様の調査はOECDでも実施しており、その調査結果

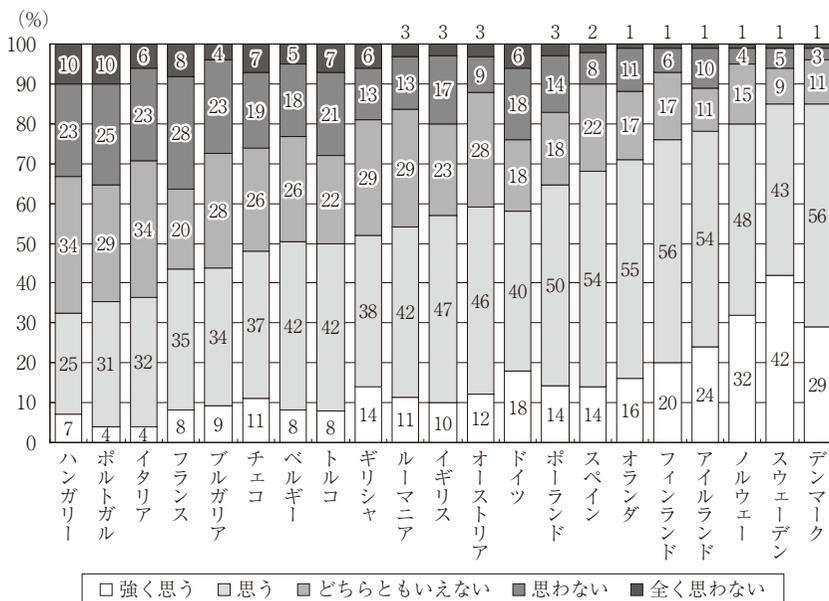
表1 生活の満足度と幸福感（ヨーロッパ主要国 2007年）

	生活満足度	幸福感	合計
ノルウェー	8.1	8.2	④ 16.3
スウェーデン	8.3	8.2	② 16.5
フィンランド	8.2	8.3	② 16.5
デンマーク	8.5	8.3	① 16.8
アイルランド	7.6	8.0	⑥ 15.6
オランダ	7.9	8.0	⑤ 15.9
ベルギー	7.5	7.8	⑦ 15.3
フランス	7.3	7.8	⑧ 15.1
ドイツ	7.2	7.5	⑪ 14.7
ポーランド	6.9	7.4	⑫ 14.3
イタリア	6.6	7.0	⑮ 13.6
スペイン	7.3	7.6	⑩ 14.9
オーストリア	6.9	7.3	⑬ 14.2
イギリス	7.3	7.8	⑧ 15.1
リトアニア	6.3	7.3	⑮ 13.6
ポルトガル	6.2	6.9	⑰ 13.1
ハンガリー	5.6	7.0	⑱ 12.6
チェコ	6.6	7.5	⑭ 14.1
EU（先進国）平均	7.2	7.6	14.8
EU27か国平均	7.0	7.5	14.5

注：1（最低）～10（最高）の10段階評価。合計欄の○数字は順位。

出所：European Foundation for the Improvement of Living and Working Conditions (2009)
Second European Quality of Life Survey (Overview) より筆者作成。

表2 将来に対する楽観的傾向（ヨーロッパ主要国 2007年）



出所：表1に同じ。筆者作成。

はOECDの調査でもデンマークは生活満足度や幸福感について総じて高い評価を示しており、OECD加盟28カ国の上位（第4位）につけている。そのデータからもデンマークの社会がウェルビーイングの状態にあると評価できるのではないと思われる。

デンマークの人々が「生活の満足度」、「幸福感」、「将来に対する楽観的傾向」で高い評価を与え、結果として第1位となった背景には、相対的貧困率がOECD加盟国でスウェーデンと並んで最小（5.3%）であること、社会保障制度やさまざまな福祉、医療、教育、雇用などの社会サービスが高いレベルで充実していること、政府の社会サービスに対する手厚い財政支援によって国民がそのメリットを実感していること、女性のジェンダーエンパワメント指数が世界の上位に占めていること、働く女性に対する子育て支援や、育児出産休制度の充実、男女の賃金格差に大きな隔たりがないことなどが、生活の満足度、幸福感、将来に対する楽観的な見方につながっていると考えることができる。

さらに社会全体に浸透する民主主義の価値（自由、平等、権利保障など）や社会連帯の自覚、共生意識などが融合して、デンマーク人の生活に対する満足感や幸福感を高める結果となっていると推測できる。

6 おわりに

以上のように総合的に理解すると、デンマークの社会はウェルビーイングの状態を確保するうえで、非常に有利な条件に恵まれていると考えることができる。あるいは別の言葉で言い換えるならば、デンマークの市民社会は「ウェルビーイング社会」であると表現できるのではないか。また、デンマークの市民社会がウェルビーイング社会となりえたとすれば、それはすでに述べたように、「北欧モデル」、「民主主義」、「ノーマライゼーション」、「自由と多様性」、「連帯と共生」の5つが不可欠な要因となってデンマークの市民社会に根付き、ウェルビーイング社会の実現に大きく貢献したからであると考えられるのである。さらにデンマーク市民社会の精神的基盤となる自由、平等、博愛といった普遍的な価値が国民の間に定着していること、また、それぞれの生き方、価値観、自己決定が尊重されていることも、デンマークの市民社会が「ウェルビーイング社会」として成長する背景となっていると理解することができよう。

翻ってウェルビーイングの観点でから見た日本の現状をみると、OECDが2008年現在の加盟30カ国を対象にして、生活の質、主観的なウェルビーイングを含めた生活全体について調査した結果は、日本では現在の状態に対して高い評価を与えた回答者の割合は35%ときわめて低く、OECD加盟先進国では最低レベルである¹⁵⁾。しかも将来の状態に対しては40数%と半分以下の回答者しか高い評価を下しているに過ぎない。この数字も加盟先進国の中で最も低い。この数字の意味するものは何か。なぜ日本はこのような結果となっているのか。

少なくとも日本の現状は人々にとって、日々の生活の中で、また将来に目を転じたときに、WHOが規定するウェルビーイングな状態、すなわち身体的、精神的及び社会的な良好な状態をもたらすような社会的・文化的・経済的条件が備わっているとはいえない状況を示している。現下の慢性的な経済不況と雇用不安、相対的貧困率15.7%（2009年）に示されるような貧困や経済格差の拡大、機能不全に陥った社会保障制度、医療、保健、福祉、介護などの社会サービスの質・量の不足などをはじめ、毎年3万人を越える自殺者、増え続ける児童虐待といった過酷な社会状況は、日本の社会がウェルビーイングをもたらすような条件を欠いていることを示している。先ほどのOECDによる2008年現在の生活の質、主観的なウェルビーイングを含めた生活全体についての調査結果が著しく低い数値はそのこと物語っているといえよう。

生活の安心が保障され、心身の健康が守られていることはもちろん、個人の尊厳や人権が尊重され、社会的な存在として評価され、自分らしく日々を過ごすことができるという人間としての当たり前な生活と生き方が保障されない社会は、決してウェルビーイングの状態にある社会とはいえないであろう。

本当に豊かな社会とはどのような社会なのか、それはどのような条件によって実現可能なのか。またそれは何によって客観的に把握できるのか。このような問いに対しては、測定可能な指標で示される豊かさ（経済的・物質的豊かさ）とは別の視点で評価する指標が必要である。個々人の生活においてウェルビーイングがどのような状態にあるのかを、現実の生活に照らし合わせて総合的に評価する仕組みが求められる。

注

- 1) 原文はHealth is a state of complete physical, mental, and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.
- 2) 『社会福祉用語辞典』（第6版）ミネルヴァ書房、2007年、19頁。
- 3) デンマークの自治領である世界最大の島グリーンランド（面積約218万平方キロ）を加えるとデンマークは面積的にはヨーロッパ最大の国となる。
- 4) 世界最初の農業協同組合が1866年、同じく世界最初の酪農共同組合が1876年にデンマークにおいて設立されている。
- 5) データは『世界の統計 2009』（総理府統計局）より。
- 6) データは『世界の統計 2009』（総理府統計局）より。
- 7) データは『図表で見る世界の統計』（OECD Factbook 2008）より。
- 8) データは『人間開発報告書 2007/2008』（国連人間開発 UNHD）より。
- 9) データは『世界の統計 2009』（総理府統計局）より。
- 10) データは厚生労働省ホームページより。
- 11) フレキシキュリティ（flexicurity）は、柔軟性を意味する flexibility と保障を意味する security の造語。流動性の高い労働市場、手厚い失業保険制度、充実した職業訓練の3要素

- を基礎とした雇用政策で、デンマーク政府が積極的に推進している。
- 12) 『図表で見る世界の社会問題』(OECD 2006年版)より。
 - 13) これに関連して障害者福祉では、「連帯」の原則とは、障害者に対する支援の手段と手当ての補充・補償(compensation)は税制によって資金供給される、という意味であるとされる(The Danish Disability Council 2006: 21)。
 - 14) 政策としての地球温暖化対策もこの分野に含めることができるだろう。
 - 15) OECD Factbook 2009: Economic, Environmental and Social Statistics, Quality of Life — Subjective well-being より。

文 献

Hanamura, Haruki

- 1998 *Niels Erik Bank-Mikkelsen, Father of the Normalization Principle*. Bogense: The N. E. Bank-Mikkelsen Memorial Foundation.

河東田博

- 2009 『ノーマライゼーション原理とは何か』東京：現代書館。

仲村優一・一番ヶ瀬康子編

- 1998 『スウェーデン・フィンランド(世界の社会福祉①)』東京：旬報社。
1999 『デンマーク・ノルウェー(世界の社会福祉②)』東京：旬報社。

野村武夫

- 2005 『ノーマライゼーションが生まれた国・デンマーク』京都：ミネルヴァ書房。
2010 『「生活大国」デンマークの福祉政策』京都：ミネルヴァ書房。

総務省統計局編

- 2009 『世界の統計』東京：日本統計協会。

高嶋昌二

- 2001 『スウェーデンの社会福祉』京都：ミネルヴァ書房。

The Danish Disability Council

- 2006 *THE PRINCIPLES OF DANISH DISABILITY POLICY*. Odder: Zeuner Grafisk as.

United Nations Development Programme

- 2007 Human Development Report 2007/2008. (=国連開発計画 UNDP / 二宮正人・秋月弘子監修(2008)『人間開発報告書(2007/2008)』東京：阪急コミュニケーション)。